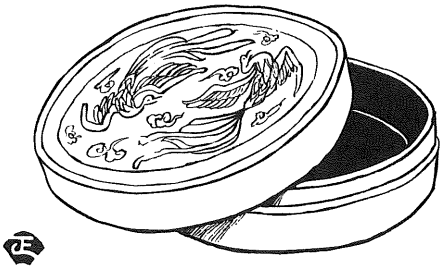
禅房十事　香合



画：正親里紗

舘　隆志

今回は「禅房十事」の中から、六番目に取り上げられている「香合」を紹介します。「こうごう」と読んでいます。香合は焼香に際して用いる道具で、香木を入れる箱のことです。

焼香とは、香木を焚いて、香りを供養する行為です。焼香はインドの風習として行われていましたが、それが仏教に取り入れられました。その起源にはさまざまな説がありますが、少なくともお釈迦さまの時代から行われていたことは疑いないようです。

お釈迦さまは、およそ二五〇〇年前に亡くなられました。正確な年次は解りませんが、お釈迦さまの最後の旅、最後の説法、入涅槃前後のことが『涅槃経』という経典に記されていて、八〇歳で亡くなられたことが解っています。

お釈迦さまはクシナガラの沙羅双樹の下で涅槃に入られました。『平家物語』冒頭の「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす」はよく知られています。もちろん、お釈迦さまが沙羅双樹の下で涅槃に入られたこ

とに因んでいます。

そして、お釈迦さまのご遺体の前には花輪が飾られ焼香が行われ、手厚く供養されたことが記されています。また、お釈迦さまのご遺体は白い布で何重にも包まれた後、香木の薪の上に棺が置かれ、火葬されたのです。

われわれお釈迦さまの教えを信奉するものが、葬儀や供養に際して香木を焚いて焼香するのは、記録上からはまさにこの時にはじまっていることになります。香木を焚いて香りを供養する「ご焼香」は、お釈迦さまの時代から続く、仏教の儀式と言ってよいかと思います。

インドにおいて、中国や日本で用いられているような香合が使用されていたかは解りませんが、香木の入れ物はなにかしらかあったことでしょう。そして、中国においては仏教全般で香合が用いられるようになりました。

『禅苑清規』という禅籍があります。北宋時代の清規（禅宗の規則）をまとめたものです。本誌四月号で、百丈懐海禅師と清規について話をしたかと思います。その百丈禅師の頃の清規の記録は残っていませんが、現存する最古の清規が『禅苑清規』です。このなかに、住持（住職）の焼香の方法が記されていますので紹介しましょう。

ちなみに、香合には大香合と小香合という二つの種類があり、それぞれ用途によって使い分けられています。大香合は大きいものだと直径三十㎝ほどで、堂内に置かれるか、手に持ち、大きな行事で用いられます。小香合は携帯用だと考えてください。

まず、「侍者が住持に向かって合掌礼拝し、その後に香合の蓋を開いて香を上げる」とありますが、ここでの香合は大香合と考えられます。侍者というのは住持を補佐する僧侶です。続いて、「両手で香合をかかげ、右手で香合をとり、左手の上において、右手で香合の蓋をとり、香台の上に置く。右手で香をかかげ、対象に向かって焚く。おわって右手で香合に蓋をし、両手で〔香合を〕かかげて香台の上に置く」と補足が記されています。このように厳粛なる儀式の仕方が丁寧に解説されています。

皆さんもご焼香をされたことがあると思います。その最初の時には、誰かに習ったのか、あるいは見様見真似だったかもしれません。でも、千年近く前の書物にしっかりと禅寺での焼香の方法が記されています。皆さんがされている通り、右手で香をつまみ、かかげてから焼香するのです。

ちなみに、「線香」というものがありますが、これは香木を練り固めて細い棒状にしたもので、中国の南宋時代や日本の鎌倉時代には、まだ無かったものです。中国の元の時代に登場し、室町時代の頃に日本の禅寺に入ってきたと考えられています。

現在は、臨済宗も曹洞宗も同じように香合を用いています。ただし、持ち方が両宗では少し違います。香合を持つ役職の僧侶が導師のそばにいますが、臨済宗ではその役職の僧が大香合を直接手に持っています。また、曹洞宗では香台の上に小香合を置いて、それを役職の僧が持つのが一般的ですが、晋山式（しんさんしき）など大がかりな儀式では、大香合を役職の僧が持ちます。

現存する記録からは、香合を直接手に持つ方が古式のようです。晋山式は正式に住持として入山するという儀式のことですが、中世以来、とても重視された儀式であるため、臨済宗・曹洞宗を問わず、古式の作法を多く現在まで伝えているようです。

焼香は、本来はインドから続く伝統的な儀式でしたが、日本では後に茶道でも行われるようになります。そして、香合は茶道でも使われるので、茶道具の一つとして理解される方も多いかもしれません。禅が茶の世界に与えた影響を考えるならば、茶道における香合は、禅を経由したものだといえるでしょう。禅の道具は、茶という文化を経由して、寺院の外でも広く用いられるようになるのです。

舘 隆志（たち りゅうし）
一九七六年静岡県沼津市生まれ。二〇〇九年駒澤大学大学院博士課程修了、博士（仏教学）。現在花園大学国際禅学研究所研究員。著書に『園城寺公胤の研究』（春秋社）、『蘭渓道隆禅師全集』第一巻（共編、思文閣出版）。